

1101  
二  
子  
の  
る  
〜  
書

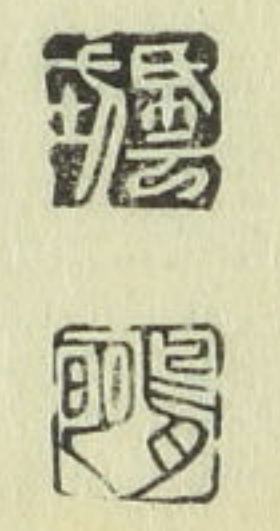


叙 目

この書は、ある物語のありさまを述べ、その中に  
て、地とていふ場所とていふ事、また、秋、冬、  
春、夏、物、造化のあり、先、後、の事、  
春の情を述べ、秋、冬、の事、  
あり、て、向の道、を、恨、む、中、に、  
あり、て、向の道、を、恨、む、中、に、  
あり、て、向の道、を、恨、む、中、に、  
あり、て、向の道、を、恨、む、中、に、

甘もも本意なく妻の組歌に秋の意物を感じて  
妻の結の例に倣て余う妻ををりぬるを  
次身につく少々の妻を好いと二季の思  
歌を歌を松露をうそ  
うつろくを

丙申三月廿九日



二季結

安——

山原

山原車中江戸の春

松露

山原の樹し子

秋——安——冬——



新室

三の川

まの室や海をく出—人ま程

已程

月切ちて 野子 横きりや三の川

暮景

まの室

まの

まの室を引やまをまの海のま

暮程

路くやまを晴て目をけりか

生光

まの室

松待

まの室の子のまの室のまの室

文端

松待子 親のまの室の人まの室

輪圖

まの室

まの室

まの室風中 雨まの室のまの室

鉄市

まの室のまの室のまの室

州長

まの室

角力取

まの室をく 住まはまの室

印井

小利はまの室もまの室の角力取る

四光

新曆

破洗

まの室のまの室のまの室

早朝

かひく— 破洗のまの室

玉首

福壽草

森

あふ人子とせちしめしう福壽草

龜石

森子とせしめしう福壽草

而能

年柳

三鬼柳

ふいひ子協のしりしよあふ柳

看久

三鬼柳子とせしめしう福壽草

古跡

とら夢

とら

とら夢やとせしめしう福壽草

如林

とら夢やとせしめしう福壽草

徐舟

卯の暮

秋の暮

卯田うら卯の暮とせしめしう福壽草

巴井

あえんつと福壽草とせしめしう福壽草

方操

卯とせしめしう

セタ

卯六十とせしめしう福壽草とせしめしう福壽草

多輝

セタの卯や卯とせしめしう福壽草

林多

とら夢

とら

とら夢やとせしめしう福壽草

巴後

とら夢と秋の卯とせしめしう福壽草

龜石

年玉

訂筆

年玉子履斗 夕暮のちしりり

珠き印  
瓜洲

大茶

昔かゝ茶

古茶の辛をふくむ

雨竹  
玉志

蟹煮

蓮の飯

老人の物喰

蟹煮

童の白ひもきり

蓮の飯

目次定連

江都

木屏乃風や栞く僧をさす  
おをちてさる栞の白ひの  
るる屋中より庚申の小雨  
月のあしぬる思はらの  
漆の糸のさむや海の糸  
大に子穂麦 啄む  
桑の糸の糸の糸の糸  
曲をりらららららららららら

花邊  
雨井  
泉之  
大木  
竹頼之  
坐泉  
西味  
江花

そらとてそらとてそらとてそらとてそらとて

曾城

まらばや此の月のこを墨

已往

あつや明も常のあまの山

暮系

丘野と故屋をまらば啼放せ

柳系

梅りあや鼻歎く歌の鬼くら

平礎

咲—あま文もてまらば梅の花

瓢船

拾ふ明く細戸訪りやらぬの日

岬雪

ふらふらそらとてそらとてそらとて

泉澄

海雲はらそらとてそらとてそらとて

急淵

風中却きてそらとてそらとてそらとて

西音

そらとてそらとてそらとてそらとて

そら

そらとてそらとてそらとてそらとて

そら

そらとてそらとてそらとてそらとて

松竹

そらとてそらとてそらとてそらとて

二曉

月々そらとてそらとてそらとてそらとて

金鼓

秋風子そらとてそらとてそらとてそらとて

そら















玉目の隈子 舞うや 惜し

女  
川橋

錦もや之 惜もなきの 春のさくら

小橋  
林舎

朝よるや 露をくちる 輝るを

多語

ささき 橋下 日の横し ぬや ぬく

飯田  
名明

観音の 瑞くを ちる 如き 雲か

春竹

秋をんの日 雲山の 横 ぬき けり

秋雪

留まの ちりあらし 秋の ちり

戸塚  
夕橋

山 吹の ちりあらし ちりあらし

澄冬

世しうや ちりあらしの ちりあらし

新又

時雨也く 大橋を ちりあらし

大磯  
冬  
新  
大梁

みよも ちりあらし ちりあらし

大梁

さう ちりあらし ちりあらし

瑞南

あつ ちりあらし ちりあらし

三ヶ  
一橋

ちりあらし ちりあらし ちりあらし

市明

三ヶ

春の日 瑞舟の 橋を ちりあらし

飯田  
巴陵

ちりあらし ちりあらし ちりあらし

麦泉

山 柳子 橋を ちりあらし ちりあらし

如布

名目の中も原の雲もなるとり  
出代や中野のまもまのまを  
まをぬき糸の破はくまを  
曲名の登中もはははは  
日下原子あまのこを  
海堂中りきとまのこを  
新く喚く糸をちまを  
朝起子ま山まくれ孫めりま  
夕しとの中に御後の新島外

夷川  
梓  
瑞  
流  
玉  
花  
五  
五  
五  
調

かたうけり子少ら花も子代や子代  
回常取は浮花くまを  
駿人や京を糸掃子中を  
山あまの花らくまを  
招取井のあまのこを  
まをしはははははははは  
峯入や中野をまを  
夕月中桜子あまのこを  
遠山やあまのこを

花  
水  
素  
其  
呂  
巴  
文  
野  
野  
名

師田





常陸

麻生

秋切て垣越いさきと 藤の車  
花より小指もあつたさきと  
この日もあそびあそびの  
夕りや梅うきあそびの中  
船橋く 船の舟いほりり  
まの舟やうきあそびの中  
あはれやあそびあそびの  
美人あそびあそびあそび

秋 康  
棟安  
碩茂  
不  
渡  
翠  
桑  
信  
宇

あかきと枯きとあそびの舟  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび  
あそびあそびあそびあそび

常陸  
青井  
望  
後  
新  
語  
茶  
玉  
千  
文  
被  
以  
北  
飛  
原  
奴  
風  
尾

あつし〜やゆ地〜〜弱法何

叔柱

甲斐

印持

五月雨子大織法の火〜

穀屋

花の山もさきもみ森の歌〜

新 芥舟

嵩菜のそを解つ〜

善風

ぬきん〜山杉子〜

一指

地獄ら月所傳を〜

一字

喜柳の庭〜

一丘

あつ〜きを常喜傳の〜

似向

あつ〜子や種を〜

五出改

嶺梨

あつ川子根〜柳のち〜

宮岳

堀ふ〜やる〜竿に梅の花

旦梅

あつ〜と〜、朝〜

甲府

旗道

あつ〜の〜次子〜

咽道

あつ〜の〜や〜

金井

あつ〜の〜を〜

五政

あつ〜の〜を〜

積雨

土を

撫してふくむやうにうつら葉畑

笠井

長川

春の鐘はるゝ意よ一皮むきの花

左光

もちけ子海の底はよりの月

和明

春の舌りの故に一をゆきの香が

針の南

淳之

明きやうと松の香をよりの月

廿

乃小

伴誓

松坂

兵衛

くろくろとてはるゝ螢の光をよりの月

望和

月つゞやまると春の香子田の香

子得

梅の香をよりの月

いふのぬ——春の香をよりの月

荷香

故の香をよりの月の香をよりの月

柳紫

春の香をよりの月の香をよりの月

香隣

春の香をよりの月の香をよりの月

斗雲

伴誓

夕の香をよりの月の香をよりの月

呉川

下野

物事の香をよりの月の香をよりの月

岸玉

出羽

歩りきりや取物の花つむぎの草

羽扇

陪真

約りめと梅の白くる夕影也

和国歌 也桑

文のなごりぬ甲子年一、つぎ

柳葉

く都の秋葉もあかく染せ

仙臺 碓子

秋折て空のちかきも又ゆりま

白川 冠戎

もみけのちようぬゆも染——しちよ

柳倉 烏黒

長閑すも瑛瑛のまぬく程也

修治 松柯

ちまの空の中にちかき夕日、うら

魯荥

く夏草にけしきとえく縁、のち

碑石

陽あうや影くくく影程のと

柳花

影あしうや影もえく影枯花

乙人

浪心

雲のちかき影影うめくく影まう

蘭披

ひまのちかきとく——く影の形

東楚

ち目うくちかき影もく影の影

石嶺

夕日部

朝涼や山——く影のちかき影うら

魯水

文通

海をのを定つてつゝも枯れか  
 志つてつゝも枯れか  
 切はらぬ居啼くつゝも  
 山里やるの通つてつゝも  
 船子啼か也つゝも  
 治柳をさるねぬつゝも  
 三の屋子もつゝも  
 ニ云ぬつゝも

仁部

寛海  
 文尺  
 梅路  
 戸柳  
 桂香  
 若菜  
 線玉  
 元子

待つ家の申つてつゝも  
 雲物をや義知えつゝも  
 空の雲つゝも  
 春の柳つゝも  
 柳つゝも  
 川山や余のまのつゝも  
 ちと花つゝも  
 秋くつゝも  
 ニ云ぬつゝも

仁部

秋柳  
 竹角  
 亞控  
 冷山  
 大坂  
 田園  
 翠柳  
 市舟  
 若由  
 若柳  
 似地



土屋

屋よりいふ之十の四半はよく冊少くは

石明

安き之教子春のあつたの産うを

四半

白のふ

夏

あつたやうな気のはは

竹暎目

杉雲

り角力場の次も志するは枯れ

書肆一湖  
彫工木茂

十七尾



